やまびこ

「靖国問題」の一語に想ふ

錦田　剛志

心を悩ます言葉がある。ニュース、新聞、週刊誌など巷に溢れる「靖国問題」といふ言葉である。耳にするたび、「あっ、またか……」と、心の中は憂鬱な雲に覆はれる。この国の思想状況を憂ふ喩へやうのない悲しさ、悔しさ、焦燥となかば諦めの入りまじった複雑な思ひが込み上げる。

碩学諸氏が説かれるやうに、かかる問題の本質は、首相をはじめとする閣僚が靖國神社を公に参拝することに対しての中国韓国等の内政干渉と巧みな外交戦術、それを政争の具として甘んじる国内の不安定な政治動向にあると認識してゐる。その本質的課題はひとまづ置いておかう。ここで述べたいのは、何の躊躇もなく当たり前に用ゐられる「靖国問題」といふただこの一語についてである。

▲　▽

そも「靖国問題」とは何たる言ひぐさか。字義のまま読み解くならば、「靖国すなはち問題なり」とでも言はんとしてゐるのか。万民にとって「靖国」が「問題」であらうはずはない。平安な国それこそが靖国の原義であらう。これが問題とは何事であらうか。靖国を願ふの永久（とは）の祈りを国事、国難に殉じられた御祭神の御霊に捧げる斎庭（ゆにはこそ靖國神社の姿であらう。この一語に触れるたび、お社に対する負の印象が刷り込まれていくかのやうに感じるのは一人私だけではあるまい。つまり、靖國神社そのものにあたかも戦争の根本問題が内在するかのごとく聞こえてくるのである。呼び捨てのごとき冷たさを帯びるこの言葉がどうしても納得できないのである。

さる方面の思想の持ち主であれば、好んで用ゐることも許されよう。それは個人の思想信条、心の営みの発露として致し方ないものだと諦めもつく。ところが、天下の公器を自認し不偏不党、公平中立を高らかに謳ふ報道関係諸氏が、靖國神社のもつ信仰の本質を十分思ひ量ることもなく浅薄非礼なこの語を無批判に用ゐるのは如何なものか。

まして神社界を含め、いはゆる保守陣営の立場に身を置くことを自認する政治家、評論家、学者などまでもが平然と口にし文字に記してゐる。

神の社への信仰を軽んずるがごときこの言葉を使はねばならない必然性は果たしてあるのだらうか。言ひ放たれるこの一語をせめて「靖國神社をめぐる政治上の問題云々」などと換言することはできないものであらうか。些細なことと笑はれるかも知れぬが、たかが一語、されど大事な言の葉である。言霊の幸ふ我が国柄なればこそ、一語の持つ重みを今一度噛み締めて用ゐねばならない。侮ってはいけないと思ふのだ。

靖國神社は政治の場所ではない。英霊を鎮め祀り、心静かに我が国と万邦の浦安を祈念する場所である。政治闘争に明け暮れる前に、まづ神仕へする私たちが心すべき当たり前のこと……それは、慰霊と祈りの本義を忘れず、子孫として祭祀の真心を失はないことであらう。一語の非に想ひを発し、自らの戒めとした次第である。

▲　▽

やまびこ執筆の機会を与へられて二年足らず、三十路半ばの生意気を御海容いただいた編輯部諸兄、読者諸賢に心よりお礼申し上げ、ひとまづの筆を置かせていただく。

にしきだ　つよし　島根・立虫神社万九千社禰宜

カット・山内　昇